

第3章 キャリアの接合点

— 南丹ラウンドテーブル(2) —

北村 真也



「南丹ラウンドテーブル」の「南丹」というのは、この知誠館のある亀岡市を含む地域の呼称です。そして「ラウンドテーブル」というのは、この地域で青少年の支援に携わっている教育、福祉、心理等の援助者のための学びの機会として2011年に自主的に立ち上げられた学びの場です。それが2012年からは、京都府の地域力再生プラットフォームとしての位置づけを得て、今日に至っています。

南丹ラウンドテーブル自体は、年4回実施され、毎回3時間を通じたディスカッションをおこないます。その実施においては2つの約束が決められており、毎回冒頭でそのことが繰り返し確認されています。一つは、参加者はその所属の一員としてではなく、個人として参加してもらうこと。そしてもう一つは、それぞれが当たり前と考えていることに対してあえて問い直しをおこなうというものです。例えば、日々若者の就労支援にあたっている人があえて「支援とは何か？」ということを考え直してみる、といったことです。この省察的な思考が、支援という大きな概念を揺さぶり、概念そのものを更新させていききっかけとなっていくことを期待しているのです。現場に働く人間は、私も含めて現実的な対応に追われ、俯瞰的な視点や大きな概念を更新させることに対する意識が薄くなりがちです。そこにあえて楔を打ち、さらに自分たちとは違った領域の人たちから、違った角度の意見を求めることを

通して、簡単には答えの出せない問いに考えをめぐらせてほしいと思ったのです。具体的な参加者としては、学校の管理職、教員、京都府(青少年、福祉、心理)の職員、児童相談所、保健所、NPO職員、マスコミ、大学院生、大学生、知誠館の生徒や卒業生、その保護者等が挙げられます。

南丹ラウンドテーブルでは、知誠館代表でもある私ですが、ここで日々繰り広げられる若者たちのエピソードと、それを捉える私たちの社会臨床学的な視点を伝え、それをきっかけとして、参加者によるディスカッションがおこなわれます。そして、その進行は、京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生にお願いしています。今年度のラウンドテーブルは、それまでとは少し趣向を変えて「若者のキャリア」ということに焦点化して考えてきました。だから、本稿においてみなさんにご紹介するのは、若者のキャリアというテーマに沿ったラウンドテーブルの記録です。キャリア形成という課題を抱える若者たち、あるいはその渦中を生きている若者たち、そしてそのキャリア形成を支援する、あるいはその決定に関わる大人たち。そのようなさまざまな視点が交差する学びの場の可能性を考えてみたいと思っています。

なお、以下のエピソードに登場する南丹ラウンドテーブルの参加者のうち、塾長は私、北村真也、川畑は

進行役の京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生を指し、他の実名表記は知誠館のスタッフたちです。それ以外の参加者は、個人が特定されないようにすべてアルファベット表記とさせていただきます。また、発言の内容で個人が特定される可能性があるものにつきましては、具体名を省略しています。

2. ストレーターではない若者たち

「ストレーター」、それは大学まで一度も躓くこともなく進学していき、2回生の後期から就活のためのボランティア経験を重ね、3回生の夏にはインターンシップへ参加、そして冬から就活を本格的に開始するといったようなライフスタイルの、日本のマジョリティである人々を指すコトバです。前回のラウンドテーブルでは、まさにそんなストレーターである学生さんたちに集まっていただき、就活の実態を赤裸々に語ってもらいました。そして今回は、一転してストレーターではない若者たち。すなわち歳若くして様々な挫折体験を味わってこられた方々4人に集まってもらいました。具体的には、かつての知誠館の卒業生が2名、現役生が1名、そして知誠館とは直接関係を持たない方が1名です。

ストレーターではないみなさんは、果たしてどういったキャリア観を持ち、キャリア形成を経験されてきたのか。そんな話が聞けることを楽しみにしながら、ラウンドテーブルはスタートしていきます。

塾長「知誠館の北村です。今日は、私の現役の生徒たちもいます。私のこういう姿をあんまり見たことがないので私自身もドキドキしてる

んですが、宜しくお願いします。まず、ラウンドテーブルっていうのは何なのかを簡単に説明します。元々は、不登校とかひきこもりの支援に関して教育委員会や行政の方が入って、どういう風にしていったらいいかっていう会議を随分やってました。ところが、一向に突っ込んだ話し合いができないんです。皆さんそれぞれに立場があるので、立場があるとなかなか話が進まないんです。基本的には、前例がないことはやりにくいっていうのがある。そのうち誰がこの会議に出るんやとか、そんな話も出てきたので、埒(らち)が明かないなっていう思いがあって途中で辞めました。それで、私は川畑先生と随分長いお付き合いをさせてもらって、二人という個人と個人で話していると結構いい話が出てくるので、そしたらそういう人たち…、個人として集まれて本音でしゃべれる人たちが集まれる場っていうのをどうしても作りたいなっていうので、このラウンドテーブルを作りました。ここでは参加に際しての条件が2つあって、個人として参加してくださいということ。それから、もう一つは、当たり前とされることを問うてみたい、問い直しの場っていうのをものすごくしたいなって思いがありました。そして、この二つを柱にしてやってみたいなということで、川畑先生に協力してもらいながら、もうこれで3年目に入ります。大体年4回やってますから、過去10回くらいはやってきました。そして、ここではいろんなテーマについてずっとやってきたんですけど、その中で実は、さっき自己紹介していただいたHさんとの出会いっていうのが、ものすごく大きくてですね。実はHさんがキャリアっていうことについてやりたいっていう思いを示していただきまし

た。それで、ほのぼの屋さんっていう、精神障害のある方が働いている、すごくおいしい料理を出してくれるフレンチレストランがあるんですけど、そこに二人で行って、そこを作り上げられた西澤心さんっていう方とお会いする機会があったんです。いろいろインタビューをとることがあって、いろんなことを考えさせられました。今振り返って思うと、そこでは障害を持った方々のキャリアの実現っていうのがテーマとしてある。今まで、なかなかお金もらえず、お給料っていうのも1ヶ月1万円とかだったんですけど、そこで働くようになって1ヶ月10万円とか、自分で部屋を借りて生活できるだけの給料をもらえるような、そういうことができるようになってたりするんです。その当事者の方のキャリアがありながら、もう一方で大事なのが、西澤さんっていう方のキャリアもここで作られていってるんです。だからその方は、そういう取り組みをしながら自分自身のキャリアを作ってきたわけです。これはすごい、私にとっては面白かったんです。で、それからキャリアについていろいろ考える機会があって…与えられるキャリアって一体何やろう？とか。キャリアをデザインするって何やろうとか。いろんな問いが私の中でも出てきました。で、キャリア、キャリアって、世の中でものすごくよく使われる。大体、そのキャリア支援は就職支援を指しているコトバなんですね。でも、果たしてそうなんだろうか？っていうことをものすごく思うんですね。実は前回のラウンドテーブルは、就活の渦中にある大学生を3人ここへ来てもらい、就活で一体どんなことが起こってるのかをしゃべってもらった機会を持ちました。有名な大学を皆さん出られて、中学、高校と優

秀にやってきて大学に入って、皆がやるように就活をして、就活も今結構ほんまに大変やっていうのもよくわかりました。その中で、最初は自分はこんなことをやりたいって思っていた夢がどんどん削がれていくっていう挫折があったわけです。しんどいこの辺でいいやって思って就職する子もいっぱいいるっていうのもわかりました。ある意味で彼らはストレーターって呼ばれる子たちです。つまりくことなく真っ直ぐやってきている。マジョリティです。多数派なんです。その多数派の就職へ繋がる部分っていうのが、あんまり理想的な、夢のような世界では多分ないなと。けっこう厳しい世界なんやっていうのを私たちは改めて知るわけですね。一方で、例えば引きこもったり、一旦つまずいたりした人のキャリアをどう作っていくかっていうのは、なかなか普通の人みたいにかかない。少しそういうところをサポートしていかないといけないんじゃないか？っていう、そういうキャリアに対する考え方もある。それで今回は、ある意味いろんなところでつまずいたりした人たちに、つまずきながらそこで何か考えたりとか、思い返したりしながら、もう1回動き出そうとした人たちの話をぜひ聞いてみたいと思いました。それで、何人かピックアップさせてもらってお話を伺おうと。一応、ピックアップした人は、Aさん、B君と、Cさんと、D君と。ほとんど同じ世代。で、私がお願いしたのは、それぞれの人にそれぞれのテーマというか、キーワードがあって。Aさんの場合は、「地に足を着ける」という、あのコトバがものすごく残ってるんです。B君にもはっきりあって、「得体のしれない不安の解明」っていうのが、キーワードとしてずっとある気がする。Cさんは、

このごろよく言うのが、「異文化との出会い」とか。そんなことをよく言う。それから、D君、彼は「自分のキャリアを作りたいということ。」キャリアを作りたいと思って、いくつも仕事を変えていくんですよね。彼にはこだわりがあって、いろいろ仕事を変えてきたような印象がある。それもすごく私にとっては印象深い。そのあたりを何か話を聞けたらなと思うんですけど…」

この場に集まった、ストレーターではない若者たち。それは私たちの教え子であったり、このラウンドテーブルの参加者であったりするのですが、彼らのキャリアを私は以前から知っていました。そしてそのキャリアには、それぞれ私によって次のようなタイトルが付けられていくのです。

「地に足を着ける」

「得体のしれない不安の解明」

「異文化と出合う」

「自分のキャリアを作る」

これらのタイトルのついたキャリア、それはある文脈性を備えたキャリアであり、キャリアそのものが物語を描いています。その物語こそが彼らの生きている意味を表現しているのかもしれませんが。

では、Aさんから順に語ってもらうことにします。

Aさん「改めましてご紹介にあずかりました、Aです。昨日、9月27日で27歳になったんですけれど、私の最終の学歴は高校の通信教育を19歳で卒業した…通常より1年長くかけて卒業したというのが最終学歴です。障

がい者支援施設が運営している美術館の企画やプロジェクト、ワークショップをしたり、施設の中でも障害のある人や引きこもりの人達と一緒に畑仕事をしたりとか絵画のプログラムを作ったりとか、っていうことを今しています。私は元々は、物心ついた時から宝塚に入りたくて。宝塚の男役トップスターになるというのをずっと夢見て生きてきたんです。子どもがあまりふわふわと夢見るっていうタイプではなくて、本気でなる、としか思ってなかったですし、テレビで流れてくる宝塚の映像を見ている、憧れの世界というより、私は必ずその世界に行くんだ、っていうかなり強い意識と…なぜか自信があったっていうような。そればかりを考えて生きてきました。で、そのためにバレエや声楽、ピアノのお稽古をしたりとかっていうことをしてたんですけども、ただ、逆にそういうことを考えていたからなのか、小学校から割と悩みが多くって。同じ学年の子たちと馴染まない、っていうのを感じていて。でもとても仲は良かったですし、小学校は100人程度の小さな学校だったので、クラスも1クラスでずっと上がっていく感じで仲は良かったんですけど、自分と考えることとはどうも違うらしいっていう感じはずっとして。かまっていきたい、とかっていう気持ちはあったんですけど、自分が今考えていることを本当に共有できる同い年のお友達はいないな、っていう気はすごくしていました。で、家に帰って母と話したりとかっていうことの方が多くて。あとは宝塚のことばかり考えていたので、それはあまり苦痛ではなかったんですけど。でも、中学、高校と思春期になっていく時期に、そういうこ

とがどんどん大きくなっていった。意識はしていなかったんですけども、大きな心が折れてしまう瞬間っていうのがあって。それは15歳の時だったんですけど、これまで行けていた学校にも行けなくなってしまった。体力も非常に落ちてしまった。もちろん宝塚を目指していたんですけども、それに取り組めるような体力も気力もなくなってしまったっていうのが15, 16, 17くらいにあったんですね。で、宝塚っていうのは18歳での年齢制限がありますので、諦めなければいけないということが自分の中で来るんですけども、これで諦められたっていう気持ちもあったとは思いますが、これまで持っていた夢のようなものがなくなった瞬間に、次どうやって生きていけばいいのか分からない。それに似合ったものが見つからないといけないと思っていたし、見つからない現実に対してとても不安で。どんどん不安も募っていくし、自信があつという間になくなっていくし、自己肯定感なんていうものが1ミリもなくなっちゃって、っていうような時期が10代、20代前半とかなり続いていました。そんな時に、施設で利用者の人達と過ごしたりとか、施設はすごく自然環境に恵まれているので、そこで花を一つでも植えて見たりとか、いい空気の中に身を置いてみるっていうことからやってみたらいいんじゃないか、って提案をしてもらったのが19, 20歳くらいの時だったと思うんですけど。で、施設の中で障害のある大人の人達と、あと一緒に畑仕事をするドイツ人の女性と出会うんですけど、彼女との真冬から始める畑仕事とが、私の中で大きな一つの転機になりました。その地に足が着いていないっていうエピソード

を前に話させてもらったのが、畑仕事につながっていくんですけど。それまで、Bさんが感じていらしたような「得体のしれない不安感」っていうのもすごくあって。あと、全ての感覚がどんどん失せていくので、すごくつらいんですけども、なんか、感覚が非常に鈍麻になってきている感じもあったし、感動したりとか心が動くっていうようなことがなくて。何を見ても何に触れても笑いたくなかったし、っていうようなこともありました。明らかに自分が、社会の中に参加していない感じがすごくあった。本当にリアリティのないことを、すごくリアルに感じていた。しかもそれは、不安とか怖さを伴っていて。そういう社会に出て行くっていうことが、自分には到底無理だっていう風に思っていました。ですけど、思いがけず畑仕事っていう…自分は全くしたことのない人間ですけど、真冬の亀岡で。そのドイツ人の女性はずっと農業をドイツでしてきた人だったので、彼女と、目の前に積んである落ち葉を丁寧に積み直して腐葉土を作るっていうことを始めて。それは本当に寒いところで、着込んで、白い息を吐きながら土を作っていくっていう、生まれて初めての経験をして。それが非常に気持ちよかったですね。人目も気にしなくていいし、自分はすごく身体が動かせて。で、気づいたら土が出来上がっていく。で、その土を使って春先に小さなハーブの種をまいていくっていうことをして。その芽が少しずつ大きくなっていった、また土に植えていったっていうことを毎日毎日空の下で…、寒いって感じてみたりとか、昨日より少し暖かいかもしれないとかって思いながら作業をしていくことが、自分が想像していた以上に、

すごく感覚を研ぎ澄ましていってくれて。
「ああこの感じ、病気になる前に感じた感じだなあ」とか。何ともいえない抽象的な感覚になってしまうんですが、「この感じ、そういえば昔知ってたな」とか、「今私、この人とのやりとりで感じがちょっとリアルになった」とか…本当に日に日に体験としてあって。ある時、その施設から畑に行く農道を、テクテクと長靴を履いてその人と歩いていたことがあって。その瞬間に、「本当に今、地に足が着いた感じがする」って、すごく思う時があったんですよ。で、亀岡って冬場霧が多いじゃないですか。あの霧のかかった感じと、自分が足が着かずに歩いている感じっていうのが、苦しかった自分の10代後半の時期をすごくイメージとして持っていて。それが「今、私は確かに歩いている」、しかもそれは歩いているという身体的な行為と、自分の心の感じが一致している、っていうのを農道を歩きながら思っただけで、一人ですごく感動して、少し病気がよくなったかもしれない、って思えたのがその時だったんですね。それが21, 22歳だったと思いますけれど、結局そのドイツ人の女性とお仕事をした丸々2年間の中で、敷地内にある畑を2人だけでずっとお仕事をしたんですね。で、もちろんコトバも通じないので。それが一つ大きなポイントだったのかもしれないんですけど、コトバが通じないから、日本語でとても不安になっていたコミュニケーションっていうのが、そもそも言語のコミュニケーションが成立していないので、とりあえず片言の英語で通じた時に大満足だし、ちょっとした単語の違いなんて関係のないディス・コミュニケーションにつながらなくて。出来た、とか関わられた、って

うことが一つずつ蓄積されていったっていうのもすごくよかったと思うし。で、少しずつ英語が話していけるようになったっていうのも、気づいたら自信になっていったっていう、後からのお土産みたいな感じですけど。そんなことがすごくあった。なので、私は畑仕事っていうものに思いがけないくらい助けてもらったし、自分の不安定なイメージっていうのが、身体と手と足を動かすことによって、その成果が出来上がってきた作物とか植物っていう存在によって確かめられるっていうことをその時期出来たっていうのはすごく大きかったのだろうなと。で、同じ時期に、施設ではアートプロジェクトっていうのがあって。アートを使って地域の人とか障害のある人とかと一緒に、新しい関係を生み出していくっていうボランティアを始めたんです。今度はそのアートっていうのが、これまでの自分が持っていた価値観とか、主流のイメージとかっていうのにどんどん新しい視点を入れ込んできてくれて。私もこんなに自由に考えていいんだとか、若いアーティストとかは、子どもの頃のわくわくした感じを大人になっても同じように感じてコトバにしたり作品にしたりしているんだとか。そういったところが、私も同じように考えていいんだっていう助けにすごくなっていったということもあります。そういったところで不安だったことが、解消というより…、別の方法で出会いとしてもたらされて。それが畑だったりとか、アートプロジェクトでの作家との出会いとかっていうことにつながっていたんですけど。そうやって少しずつ、一人また一人って出会っていく人が増えた。またその人とのやりとりっていうのが増え

ていくことによって、社会に自分が出て行っている感じというのも確かに経験ができて。で…、まあ少し端折りますけれど、気づいたら、美術館のスタッフをしているというようなところなんですけれども。一番大きな転機としてはそういうことが一つありました」

塾長「なるほど。ありがとうございます。すごいリアルに話してもらい…。」

川畑「土を作る…」

Aさん「花を育てたりっていうよりは、私は土作りが本当によかったなと。一番寒い時に土を作れたっていうのが一番よくって。今でも土を作っているのが一番好きです」

塾長「何て言うかな…、こう、毎日毎日、来る日も来る日も何かをし続ける。私は片一方でヘレンケラーを思い出していて。リアルな感覚みたいなのが蘇っていく。そのためには、ずっと継続的にやり続けるものがある気がする。それともう一つは…こういうことがあるまで、Aちゃん自身はこれまでいろんな人と出会って、もちろん生きてたわけやけど、でも何か、それはもう一つリアリティがなかったのかもしれない。その感覚が蘇って来るみたいなことだったのかもしれない。」

久しぶりであったAさんの語りに、私は聞き入っていました。私の記憶の中では、このラウンドテーブルでAさんが初めて自己紹介をした時、「地に足がついてなかった」という表現をしたように思います。ですがその時の彼女は、まだほとんどコトバを持たない状態だったようにも思います。辛かった過去に触れるたびに感情がこみ上げ涙が流れていました。

そんな状態から彼女は自分のコトバを手に入れ、こうやって一つ一つ、確かめるように語り出していったのです。それは土づくりに表現されていたように、決して派手な過程ではありませんでした。毎日毎日、ただ黙々と続けられる作業を通して、彼女は自分と向き合い、自分のコトバを温めてきたのかもしれない。だからこそ、そこには彼女の物語が表現されているようにも思えるのです。

塾長「Aさんの話の中にB君の話もちょっとあったけど、「得体のしれぬ不安」みたいなものと、「地に足が着かへん感覚」それはちょっと近いかな…？」

Bさん「そうですね…確かに、近い感覚を持ったことはあるんですけど。地に足が着かないというよりは、僕の場合は、周りとの距離感がまいちよくわからないというか。僕が元々ここに来る前に、中学校時代に不登校になりました。原因が、いじめだったり中学校に馴染めなかったりとか。そういうものが原因というか。ただ、原因というのも自分の中ではまだはっきり分かっていないんですけど、そういうのがあって、ここに来て。いろいろ勉強したり、マツモトに買い物に行ったりしながら、ちょっとずつ周りと慣れるような感じにはなった気はしたんです。だけど、未だに人との距離感というか、自分がどういう風に接したらいいのかとかがつかめていないところがまだ若干残ってる感じがしますね。ただそれはその後、高校でも友達と出会うんですけど、そういったところで個人個人とちゃんと付き合えたり、話してて楽しかったりとか。そういうところでちょっとずつ自分の実感として回復していった感覚はありました

ね」

塾長「B君のことで思い出すのは、彼はものすごく本を読むのが好きで。本読んでたよな、割と？」

Bさん「うーん、むしろここに来るようになってから読み出した」

塾長「GTという教材があって、小学校の。それを10級から1級まで全部終わらせたんですよ。結構難しい教材なんやけど。算数とか数学はいまいちだったかもしれないけど、国語はすごく長けていて。来る日も来る日もその教材をやり続けた。すると、何が変わるかって、彼は、最初動きもぎこちなかったんです。ロボットのように動いてたから。発する言葉も3パターンくらいしかなくて。何聞いても「まあまあ」とか「大体」とか。そんな風にしか言わなかった。それがある時、お母さんが面談で、「手が動くようになりました」っておっしゃったんですね。それは、彼はほとんど引きこもってる状態で、カチカチに固まるので、手は一切動かない状態。それが、手と足が同時にしたりしてぎこちなかったのが、ようやく手が自然と動くようになりましたということです。それを私はエピソードとしてすごく覚えてて。小さい子どもの頃は、多分そういう風に動いてたと思う。でもそれがどこかの段階で、「地に足を着け始める」、そういう作業があったのかもしれない。そんなことを少し思ったりもした。結構コツコツとやってたイメージがあるんやけど、どう？」

Bさん「そうですね…何がそう、っていうよりは、いろんな積み重ねがあって緊張がほぐれたっていう方があると思うんですけど。亀岡には鍛山神社っていうところがあるんですけど。あの辺から通ってたんですけど、結構距離があるんですね。20分から30分くらいか

かるんですけど、それをお昼間に自転車で動くことによって…、周りの目とかは気にしながらは来てたんですけど…、それがほぼ毎日続くことによって、別に外に出ても大丈夫なんだっていうのが、徐々にわかってきたっていうのもあったんじゃないかと思います」

B君の場合も、積み重ねた自分の行動や経験が緊張を解いたと言います。人前に出ると過度の緊張に苦しんでいたB君。彼の表現を借りると、「得体のしれない不安」そして「相手との距離感」というキーワードが飛び出します。その2点が、よくわからないのだと言うのです。そんな中、お母さんに連れられて、知誠館へとやってきたB君。実はB君こそが、私たちが初めて出会った不登校の生徒であり、初めて出会ったひきこもりの生徒だったのです。だから彼と出会うことがなければ、私がこうやってこの原稿を打つこともなかったのかもしれない。

そんなB君でしたが、知誠館に通い始めて1年半、彼はまるで別人のようになっていきました。高校では生徒会活動に参加、そして文化祭ではバレリーナに扮し、白鳥の湖を踊るわけですから…。そしてB君は今、大学院で不登校研究に取り組んでいるのです。「得体のしれない不安」にどう向き合うべきなのかを、論文にまとめていきたいのだそうです。

塾長「Cさんのことを少しだけしゃべると、Cさんは別に不登校…になったことはなかった？でも、学校には行ってなかったよね？」

Cさん「行かなかった時もありました」

塾長「引きこもってはいないよね？」

Cさん「遊んでました」

塾長「遊びに出た。何年生くらいにサボり始めるようになったんだっけな？」

Cさん「中学2年生くらいですかね」

塾長「2年生くらいから、学校をサボるようになった。学校をサボって何をしてるかという、サティ（大手スーパー）に行ったり。髪の毛は茶色。そういう感じで学校に行かなかった。でもまあ中学3年になって、ぼちぼち高校に行かないとなっていく風に思っ、ちょこちょこっと勉強して入れる高校に入ったものの、すぐ辞めるんやね。どれくらいで辞めた？」

Cさん「3ヶ月弱です」

塾長「3ヶ月で辞める。辞めた時は16歳かな？そこから、大体20歳くらいまで…」

Cさん「もうちょっとです」

塾長「21歳くらいまでだったら。そんな生活を送る。そこで、彼女は変わるわけ。助産師になりたいと思う。それが22歳。それで、看護助手という仕事なら資格がなくても出来るから、そこで働きたいと思う。ところが、中卒なんです。高校すぐ辞めてるんで。そうするとどこの病院も雇ってくれないということで、今、園部にある知的障害者施設で、介護の仕事をしている。それで、看護師になりたいと思って自分で勉強するもののテストは全然分からへん。っていうことで知誠館に訪ねてきたのがこの春です。それから、もう…びっくりするくらい勉強するんです。びっくりする。手本のような生徒。それと、ものすごく他の生徒達の面倒をよく見てくれる。彼女、ものすごく健気に勉強するんです。で、それをやっていくうちに、何か自分の中でも様々な変化が見られたりとか。こういう環境って、初めてでしょう、きっと。多分勉強っ

て学校の時も機会としてはあったと思うんだけど、全然取り組み方が違う気がするんやけど」

Cさん「私が学校に行くのは、休憩時間とか放課後でした。そんな感じ。授業中は怒られるんで、保健室とかにいました」

塾長「すごく聞きたかったことで、昨日も聞いてたんだけど、そんな風に生きてたのが21歳くらいまで。何で変わるんやろうね？21歳って。何なんやろうね。自分の中で意識が変わり始めるのは、何があなたをそういう風に変えさせたんかな？」

Cさん「いつまでもふらふらしてたらだめやなって思ったのが最初ですね…」

塾長「そう思わせるきっかけみたいなものはあったの？」

Cさん「きっかけは…多分なかったんじゃないかな。これっていうきっかけは、私にはわからないです」

塾長「ふうん。じゃあもう一個。助産師っていうのは、どうして助産師になりたいと思った？」

Cさん「何で助産師になりたいか…」

塾長「Cちゃんにとって助産師って何なの？」

Cさん「えー…命を扱う仕事ですかね…」

塾長「看護師じゃなくて助産師になりたいんや」

Cさん「…ですね」

塾長「中学校時代、全くと言っていいほど勉強してないので、ベースは多分小学校くらいの知識。でも彼女は諦めないですよ、絶対。何なんやろうって思うくらい。現代文の問題をやっても一問も合わない。でも彼女は諦めない。私は本当感動するわけ。この子はほんまに諦めへん。何か自分の人生を歩きたい、って思ってるし。「レジリエンス」というコトバがあります。辛い状況からの回復力といいますか、その強さのことです。自分のキャリア、自分

の人生を作っていく強さなんですよ。皆と同じ人生を歩くってわけじゃなくて、私は私の人生を歩きたいから、っていう。その強さがある。そういうのをどこかで感じて。B君のひたむきさもどこかでそういうのにつながるかもわからへんし。Aちゃんのそういうところにつながるのかなあとか。そういうところに感動しますね」

Cさんには不登校経験があったわけではありません。彼女は、中学時代から学校をさぼる癖があったらしく、とりあえず高校へ入学したものの3ヶ月で退学、その後フラフラと21歳まで過ごしていたと言います。ところがどういうわけか、ふと気がつくのです。このままではダメだと。そこから彼女は変わり始めます。

知誠館に入学し、高認合格を目標に勉強して、それから助産師になるために看護の専門学校の受験を目指し出します。そしてやがて私たちは、彼女の一生懸命に取り組む姿に魅かれ始めます。その強さやひたむきさ。そこに、決して諦めようとしなない彼女の人生への態度を見るのです。しかしきっとそんな彼女の強さは、まるで意味をなさなかったかのように思える21歳までの生活が支えているようにも思うのです。問題のある状況が新たな機会を生み出していく、まさに機会開発へと向かう変容過程を彼女は生きているのかもしれない。

塾長「D君も強いよな？」

Dさん「いやー、自分では全く今もそんな風に思わないですね。未だにそんなに強いなんて思ったことないし。小学校の時から僕は勉強嫌いで、ずっと勉強してなかったです。体育と音楽だけ4とか。高校までそのままつらつらと来てしまって、このままでは卒業出来ないってなった時に、知誠館に来させてもらって…ものすごく不純な動機で来たなど。そこからもう、小学校の学習からやり直して、ドリルみたいなので勉強して。今でも勉強はできる方ではないけども、ここに来た時に思ったのが、塾長がもっと若くて、淫瀾と…、バーベキューとかしたはってね。この人はなんか、周りの今までの大人と違う生き方をしてはるなど。楽しそうに生きてはるなど。好きなことをやって、なおかつ家族を養う分の収入は保ってはって。こういう生き方があるんや、こんな風に生きてもいいんやって。周りの環境に生き方が決められてるような感じやったんで。こんな、1を取ってて卒業も出来ないようなやつは、ある程度体力があったら誰でも出来るような仕事をしないとイケないんだろうなと思ってたんだけど、そこを変えてもらって。そこから、楽しく生きないとなあと。今までは面白くなかったんです。決められてて。選べるって言うけど、周りの環境見てたら選べないやん、って思ってて。そこでパンと変わったことは今でも忘れませんし…。そこからいろいろありましたけど、まあ子供ができたんでそこから大学は行かずに働くわけですけど。理想は決まってるわけですよ。塾長みたいな感じで、好きなことをやってご飯食べたいなど。でも自分のやりたいこともわからへんわけです。現実働いたら職場にこういう人はいないわけで。周りの優しい人、今までいらっしやった先生たちも（職場には）いないわけで。ずっと延々と同じ作業をやってて。「これ何の部品ですか？」って主任に聞いたら「わからへん」っ

て答えられる感じやったから、これはあかん
と思って。つまらないというか、それを調べ
るほど興味もない。じゃあこれは好きじゃな
いかな、と。そういう感じで…いくつも仕
事を変えた理由はそこかな。最低限ご飯を食
べられる分だけは、っていうのが僕にとって
の現実味。地に足を着けるポイントは、嫁と
子どもを食わす、っていうところは最低限し
ないといけないし。でも、楽しく生きたいん
です。理想と現実の、そこの溝がこんなに大
きいから。勉強も足りてないし、好きなこと
すらも分からへんし、何に懸けたらいいかも
分からへんし。それが埋まるまでがずっとし
んどかったですね。嫁との喧嘩も大量にあり
ましたし。上の子がダウン症っていう形で生
まれてきたので、それも多分結構大きくて。
言い方はあれやけど、普通の健常者に比べた
ら出来ひんことがすごく多いし。ダウン症だ
からこそ出来るっていうことももちろんあ
るけど、それを見つけるまでも大変やし。自
分も好きなことを見つけられてないのに、子
どもにそんなこと見つけられるのか、果たし
てっていう感じでちよくちよく塾長のところ
に来ていろいろ聞きながら少しずつ埋め
ていったのかな。自分なりにですけど。今は
理想と現実の差がこれくらいに狭くなって
来てますね。そこのバランスを取るのが楽し
かったりするんで。人生楽しいって言ったら
大袈裟ですけど、上手に回せるようになり出
したのは知誠館がきっかけですかね。そんな
感じなんですよ。」

塾長「Dさんはだから…高校卒業して、大学行きた
いって言って。海洋大学行ってイルカの研
究とかをやりたいとか言ってたんやけど、付
き合ってる彼女がいて、その間に子どもが
出来るっていう。それで彼は泣いて。やっぱ

り要するに自分は行きたかったんだけども、
その夢を諦めないといけないと。私に泣いて
言った記憶があった。だからあれが…年齢で
言ったら19かな？」

Dさん「そうですね」

塾長「それでその子は、ダウン症だったんや。まあ
…神様はそうやって彼に一つの試練を与え
るんかって片一方で思ったりもしたんやけ
ど。職も、彼の中では転々としていくわけや
けど、ただ転々としてるわけじゃないわけよ。
いろいろ模索しながらで。今彼が何をしてる
のかというと、保険の…あれは自営みたいな
形？」

Dさん「そうですね、一応ファイナンシャルプラン
ナーっていうのをしています…」

塾長「そういう仕事を彼はしていて、二人の子ども
がいて。こうやって生きてるわけやね。たい
したもんやなって思いながら。家族がいなが
らそうやって彼は生きようとしてるわけや
から。そういう世界なんですよ。何でこう
いう話を話してもらいたかったかっていう
と、皆豊かなんですよ。私からすると豊か
な世界なんです。だから、普通のマジョリ
ティの学生たちの就活ってあんまり豊かな
イメージがなくて。それは通過をしていか
ないといけないのかもわからへんけど。こっ
ちの話はすごいドラマになってて。それぞれ
あれやこれやといろんなことがあるような
気がするんやけど…」

D君の話では、私がそれまで知っている
大人たちとは違い、実に楽しそうに生きて
いるという感想を持ち、「自分もそんな風に
生きたい」と思ってくれたようです。どうい
うわけか、私自身に憧れてくれるようにな
ったのです。憧れはとても強い動機になり

ます。憧れの存在とは、生きたモデルのような存在です。従って、日々観察の対象となり得るのです。それまでどこか諦めかけていた自分の人生に、彼はどこか希望を見出し始めます。

それからは勉強も大変頑張ってやり始め、大学進学を目指すようになっていくのですが、そんな志も挫折せざるを得なくなります。当時お付き合いをしていた彼女が妊娠、そして結婚、出産と、めまぐるしい流れの中でD君は若いお父さんになっていきます。そうせざるを得なかったのです。そして彼は、家族を養うためとにかく働くのですが、彼の頭の中には依然、楽しみながら働きたいという思いが存在していました。結局D君は、職を転々としながらもそんな人生を追い求めることになるのです。そしてとうとう、ファイナンシャル・プランナーという、自分で納得のいくキャリアを手に入れたのです。

塾長「ありがとう。ざっとこれで4人の話を聞かせてもらって、1時間まわってしまいました。最初に言ったけれども、このラウンドテーブルっていうのは「問い直し」っていうのが大きなテーマとしてあるので。私はキャリアっていうことをものすごく問い直したいっていう思いがあって。ストレーターじゃない人達って、ある意味つまずいた人。でもそのつまずきっていうことこそが、大事なキャリアだよなと思ったりする。つまずかないとわからないというようなことがね。でも従来のキャリア支援っていうのは、つまずかないような道をどういう風に提示しますかとか、どういう風に支援しますかとか。そういうような

方向性を持っているように思う。でも実は、つまずく事はすごく大事だって…。でも片一方で、ここに来る生徒たちは本当に、最初は自分の物語を描けない状態でやってくる子がほとんどです。地に足が着かなくて、どうしようもない状態に来る子ども達、若者達っていうのがほとんどです。要するに、つまずきの中で壊れていくとか、閉塞状態になっていくとか…。でもやっぱりつまずくことっていうのはものすごく大事な過程なんやと思う。でも片一方でそうやってつぶれていく人たちがいて、また一方ででもそこから、自分の物語を作り上げていく人たちがいる。一番最初のAちゃんの話で言ったら、地に足を着けてる感覚を蘇らせる、みたいなこと。その違いって実はものすごく大事なのかなっていう感じがするんですよね。そう考えると、キャリアっていうのを考える時に、そこら辺が実はポイントかなっていうのがあって。そんなことを思いつつ、川畑先生にバトンを渡そうかなと思ってるんですけど…。」

川畑「いやー…僕、今の話聞いててめっちゃ面白かった。そんな面白い話を聞くのも面白いけど、そんな面白い話を私は出来るやろかって思ってね。そんなことを考えると悔しくてね。今からちょっと話す話は、全然関係ないじゃないかって思われるかもわからへんけど、私の中では一緒でね。今仕事でも興味としてでもやってるのは、中学生とか小学生のみなさんとかにやる、心理検査があるんですよ。審判形式発達検査っていうのがね。子どもと遊ぶ検査なんですよ。赤い積み木をならべて積んで、それと同じトラックを作ってもらおうとかいう検査があるんですよ。発達検査って聞いたら嫌いやって言う小児科医がいるくら

いでね。変な心理職が検査して発達指数が80
やって言ったらお母さんがそれを悲しんだ
りってということなんかから、役に立つどころ
か害ばかり与えてるじゃないかって言う
ようなことが今でもあるようなものなんや
けど。そうじゃなくて、子どもと遊ぶわけ
でしょ。そこから、その子どもの目には世の中
がどんな風に映ってるのか。聴覚障害がな
ければ世の中のいろんな音が届いてるわけ
けども、その中でどんな意味を感じて、見
たり聞いたりすることが、その子の行動にど
のように影響を与えているのか。それでどう
やって動いて生活してるのか、どんなこと
がスムーズに行かずに生きにくいという風
に感じてるんやろうか、みたいなことを
検査やった私が、あたかも自分のこと
のように語りたいていうのが、それ以上
なくそれ以下でもない思いというか、願
いなんですよ。だから、検査というもの
を子どもとの間に置きながら、どんな
風に僕と人間関係を作るんやろか、
みたいなことを全部見てね。そこから
そういう仮説を出す、っていうことを一
生懸命やって。そのために、出来るのと
出来ないのとは何の差があるんやろう、
出来ない子にはどんなことが見えて
ないんやろうって一生懸命考えるん
ですよ。そうして見ていって、なる
ほどなというイメージが浮かぶ。それ
を適切にコトバにしたりする。形式
発達検査を使ってお仕事してる人
たちにその事を話したりすることも
多いんだけど、そのことが結構役に
立ってもらってる場所があって。
いや、それがね。自分が面白いな
って思って、してる事と、それを使
ってお仕事してる人のニーズに合
って、自分としての、びしっとし
たことをやれてるな、っていう。や
っとこの年齢になって感じてみたり
ね。そういう感じが

すごくあるんですよ。それでね。そ
ういう体験っていうのは…大人と子
どもの違いは何だっていう中で、大
人っていうのは、思ってる事と言
う事が違う。そういう側面を持って
ないと大人の世界は生きられない
から。だけど子どもは、思ってる
事とする事が一緒の方が天真爛漫
やし、そう言われるわけでしょ。
そういう意味で言えばね、価値じゃ
なくて、いろんなことが一致して
る、子ども体験、みたいなことな
んかなと思ったりね。子ども体験
っていうのが…塾長さんが言うよ
うな、つまりの中にある価値、み
たいなのにつながるようなところ
があるんかなとか思ったりね。み
たいなことを今思ってるんですけど
ね。…まあ、序論として」

面白い展開になってきました。本来
進行役の川畑先生が、当事者たちの
話に感化され、自分自身のことを話
し始めたのです。場がいつもとは、
少し違った磁場を作り始めること
になります。

塾長「私とか、自分のことを大人と
思っていないかもしれせん。結局大
人になれないのかなとか思いなが
ら。死ぬまで子どもか、とかって。
私、50歳になった時焦ったんです
よ。50歳っていうのは、ある程度
出来上がった人になるかなって思
って。40代までは、まだ若造か
って言われるんやけど、50歳にな
った時プレッシャーがあつて。わ
あ、50歳か、とかって。そんな感
覚がものすごくありました。だか
ら、生徒がここにいて、彼らを子
どもだとかってあまり意識してい
ないかもしれせん。例えば、Cちゃん
にはCちゃんの人生…っていうコ
トバはちょっと大きいかもしれん
けど、それを私と出会うことで、ど
こかで共有して

る感じがする。私の中にCちゃんの人生がどっか入り込むっていうか。その反対の事もあるかもしれません。その感覚が、何となく私にはあります。それはKちゃんにも、Mちゃんにもあるのかもしれないけど。それは彼らの人生でもなくて、私の人生でもなくて。どこか共有されていくような世界。だからどっかDさんともそんな感じやと思うねん。Dさんのことは、自分の一部でもあるような感覚がありますね」

私も感化されていたようです。ここでの私の主張は、援助者と被援助者とが、実は双方向の関係にあるということ、そしてそれは決して上意下達的なものではないということです。援助の過程ではその関係の中に、それぞれが関わる世界が出来上がっていき、その世界を共に大事にしていく。そんな援助観を表現しています。

塾長「Gさんも、現場で多分いろいろ支援とかかっていう枠組みの中で仕事されているわけですが、いろいろと感じられることがあるんじゃないですか？」

Gさん「いや…あんまりね。支援ということを考えてしてないんですよ。まあそこまで行っていないのは未熟だからかなっていうのもあるんやけど、これ以上、悪くならないように、目の前にいる人とただ対話をしてるだけ。そのことが悪くならないことにつながっているのかもわからないんだけど、とりあえず前の人の話を聞いてるだけ。それしか出来てないし、それしかすること無いかなと思う。その後ろでは、働いててもらわないと駄目なんですけどね。制度とか何とかっていうのは活用していかないとあかんのやけど、と

りあえず目の前の人っていうことしか思わないなど。今の話聞いてて、学校に行かなかった人たちがいて、でも私は学校は行ったけど、そう言えばその時習ってた書道塾はかなり行かなかったなと思った。まず、行けて言われて行き出したのが嫌やったのかもしれないけど、途中で行かなくなりましたね。バレまして、ものすごく怒られて。行かへんのやったら辞めろって言われました。で、辞めなかったんですよ。で、辞めなかったら今でもやってるんですよ、実はね。これ何なんやろうって…」

塾長「へえ。今もまだやってらっしゃるんですか？」

Gさん「やってるんですよ、性懲りもなく。長いな～って、ふと。でもよく考えたら学校は行かないと仕方ないものって割り切ってたのかもしれないけど、その書道塾にはなぜ行かないといけなかったのかが、その時はわからなかったのかもしれませんが。でも辞めろって言われたら、負けん気が強いから、「なにくそ、辞めへんわ」って思って、まだ続いているんですよ。というか、これしか残ってないんですよ。最後これで食べれたらいいわっていう思いもあるというか。そんな感じやなあと、子どもの頃の自分を思い出しましたね、皆さんの話聞いてて。でもそれも出会いとかタイミングが偶然組み合わさって、出来たこと。ほんまに偶然なんじゃないかなあ。今の自分がこの状況であるのが偶然なんじゃないかなあってすごい思いますね。仕事もずっとこの仕事をしてるわけじゃないじゃないですか。私だって、転職といえば転職ですよ。3年か5年経ったらあれやってこれやってね。全然違うことやるわけですよ。ある種の転職を重ねてきたなっていう感じはある。でもどの仕事も面白かったし、どの

仕事も楽しもうと思ったところはありませんね。だから、たまたま違うことになったものに興味を持てる自分やったのかもしれませんが。興味っていうのを、じゃあそれを楽しもう、また変わったらそれを楽しもう、っていう感じ。それをしみじみと感じました。皆さんの話を聞いて。そんな感じです」

川畑「どうですか」

Hさん「いや、皆さんの話聞いてて、なんか豊かやなあ。私は…大学までスッと来て、今の職場に入る時は1年間ゆっくりさせていただいた。だけど、そこまでは順調に行ってた。そこからの人生は違うんですけど。いろんな出会いがあったり。全然違う分野に異動しますからね。転職するかのように付き合う人たちが変わるので、そこからの人生はいわば広がりかね、専門分野で特化していないその分だけ、いろんな人とのつながりとか広がりが出るんですけども。でもそこまでの人生って、学校生活で知り合った人くらいしか幅がないですよ。でも、今のお話を聞いてると、その中でいろんな転機を経て、今があるわけですね。それは大きな出会いがあったり、いろんなことをしているわけで。その時は、非常に大変で、苦しかった思いを抱えてらしたのかもしれない。けれど、そこが何かのきっかけで変わっていった時に、何かすごく豊かな感じとか、そんなものを感じるんですよ。で、自分を振り返ってみると、小さなつまづきはいっぱいしています。大きなのをしてないだけで。それって、どうなんやろなあ、結構皆さん、そういうことを経た後はしなやかに生きてはるよなって。今聞いてたら。外から見てたら、そういう風に見える」

Iさん「だけど、しんどいと思いますよ」

Hさん「うん、しんどいのはしんどいと思いますよ」

Iさん「いやー、今いい意味で聞いたんですけどね。学校は行かなあかんとこやと思った。それからね、異動…転職を受け入れつつ。でも転職っていう一から違う分野に入れられるっていうのを絶対に受け入れながらそれに合わせていかはる能力ってすごいなって思って。行政の方とお会いする度に思うんですよ。そして吸収して、見事にこなされますでしょ。だからすごい能力やなって思うんですけども。それで、豊かやって言っていたけど。そんなの思えないでしょ。ものすごく辛くて、今ちょっと明かりが見えたりちょっと自信も出来たりするのかなと思うけど…。例えばやけど、GさんとかDさんとかってやっぱりある意味強いですよ。それで、今豊かやって評価してもらってる皆さんってやっぱり、いわゆる不器用。それで、その時はいたたまれない思いをして。苦しくて、精神的にもある意味で病んでるとか。問題視されてたりとか。そういうのって、学校から見たら大変じゃないですか。で、そういう評価ってピンピン感じてるじゃないですか、本人たちは。で、めちゃくちゃ弱いんですよ。受け止めていけない。だけど合わせられないという。で、合わせられないけど、これをやるという強いものも見つかっていないという」

Dさん「それがわかったら、早いんですけどね」

Iさん「そうそう。だからこう、迷ったり隠れたり。それから自分の中でね、いつ明けるとも知れない暗闇にいますよね。その時のいたたまれなさとか、苦しいって思うし。選ぼうと思ってるわけじゃないし、どっちがいいとかじゃなくて、選べないんですよ」

Dさん「気質みたいなもんやね」

Iさん「そう。だからそれで私、Gさんが偶然というコトバを使わはったのも面白いなど。偶然

やと、全ては。でも必然やとも言えるんですよ。その個体に備わってる道は、なれない者にはなれない。だけど、大多数が学校は行かなあかんものや、とかっていうのが作られてると、なかなか外れるのは難しい。外れたくて、外れてるわけじゃない。やっぱり行かないといけないところに行けないようになっていくしんどさっていうのはある。けども何とか、道を見出した人たちは、そりゃ面白いし、すごいなあ。こんな道もあるやん、って言ってあげられるじゃないですか。で、そういうのを言ってあげられるのを、ちょっと前に言ってあげられたり受け止めていてあげられたらね。親や学校がね。そんな生き方もあるんやなあ、ええなあ、今、道を探したはるんやなあ、とか言えるようになるくらい…。この頃、段々月並みになってきましたけど、多様やということが普通になっていったらいいなあ。だからどっちがいいっていうものじゃないし、格好いいなあと思いましたよ、Gさん」

Dさん「その対応力の方がすごいと思いますよ。こちらからしたら出来ないわけですから」

Iさん「そうですね。強いし、しなやかですよ。これもまた豊やし。強いし。それこそ一つのことを続けたはるんですよ。その中でいっぱいいろんなことを獲得したはるんやろうなと思いますよ。それで書道続けてはるとことか、面白い。でも苦しいやろうなあって。ほとんどの人がやってる時にやれないしんどさ。それが思春期の時にやって来るし。思春期から揺れるしね。Cさんが、何じゃあ学校行こうと思うようになったのかっていう時に、いつまでもフラフラ出来ないって言わはったけど、それだけじゃない何か、動かされる、決断するものっていうのがある

んやろうし。そんなことに皆、この4人は、ここでなんとかしないとあかんあつていうのが、意識できる時とできない時があるけどやって来る。やって来るものを持ってっていうことは幸せやけど、なかなかそれが来ない人もいるって思いますね。」

挫折からの再出発。それは「セカンドキャリア」としての意味を持ちます。ファーストキャリアが個人の人生を保証しきれない時代の中では、むしろセカンドキャリアをどう構築できるかが問われているように思います。セカンドキャリアは、ファーストキャリアの反省の上に成立します。「自分が本当にしたかったことは何か?」、「どこに問題があったから自分は挫折したのか?」、「これからどんな風に生きていきたいのか?」。様々な問いの上に、セカンドキャリアは成立するのかもしれない。

川畑「例えば、赤ん坊が生まれた時っていうのは100%世話してもらわないと生きていけないから、完全に守られてるわけですよ。それで段々子どもが大きくなっていくんだけど、やっぱりほら、ずっと世の中から守られんと生きていけへんからね。だけどその中で大人になってくると、守られてることの中にも決められてると、飽きてくるとかね。どこかの時点で、もう誰も守ってくれへんから、自分で自分を守らないとあかん時に入るんやと思います。だからその時に、自分で自分を守る時に何か支えがないと立ってられないとか。その支えがなかなか見つからへんとかね。みたいなことがやっぱり起こってくるんかなあと思って。で、何で20歳過ぎてからっていうのがあったでしょ。ちょっと間違いかも

しれんけど、体力のピークっていうのが19歳くらい、っていうね。そこからもう下がってくるっていうことを思うとね、体力だけじゃなくて、脳機能もいろんなものも19歳にピークが来てね。そういった時に、なんて言うのかなあ…一人で生きていかないとあかんっていうようなことを思うような時期に差し掛かる。20歳前後で。それが制度で言えば成人式過ぎてからとか、その前からとかいろいろあるけどね。なんか、そうなるんやろうなあと。そういう時に何か見つければいいんやけど。見つからなかったらなかなかしんどくなるのかなあと…」

Dさん「なんか、そういうタイミングが来るのが早い気がしますね、今の時代っていうのは。情報がすごく錯綜してる時代やから。成人式でずっと昔に20歳って決められたんだと思いますけど、今の若い子って…」

Iさん「でも、もっと昔はもっと早かったですよ」

Dさん「そうですか」

Iさん「14歳とか、その辺で元服してるじゃない」

Dさん「それくらいで、いいんちやいますかね」

Iさん「そっちの方が、私は理に適ってると思うんですよ」

Dさん「そうですよね。そっちの方が…」

Iさん「つまりそれ以上は、今度はちょっと近代化っていうか…いろいろ知力の時代になっていくから。学力を身につける期間も長くなっていくし。でも個体としてはぎりぎり20歳くらいまでって言われたように、そうなんだろうねえと。だから昔は仕組みが追い付いてなかったから寺子屋で終わったし。不登校が出来るっていうのは、学校があるから不登校って言われるのでね。小学校でやめといてあげたら、それなりに皆どっか手伝いに行ったり、勉強好きな子は勉強したり、っていう風

に出来るわけですよ。だからやっぱり、高度…何て言うんですか。そういう社会になってから、その人に合った道はある意味で狭められていってるんやなあって。まあしょうがないからね。逆戻りは出来ないから」

川畑「戦後も不登校多くてね。でも、不登校してたけど家の手伝いはするとかね。それだったら仕方ないな、って、問題にはならなかったんやね」

Iさん「そうそう。やっぱり第一次産業が主体やった時はいいんですよ。だからやっぱり知力偏重の時代、社会になっていく中で、能力の格差、そこで判断されるようになってくるからコンプレックスを持たないといけないようになっていって。それで精神的にもしんどなるよね」

Eさん「学力的な能力と、第三次産業に入っていたのと、もう一つ、学校とかで言うと「生きる力」とか出てきた時代に道徳心の教育っていうのが出てきたみたいに、問われる能力が増えてきてる。それ自体が、個人に押し付ける能力っていうところになってきてるんじゃないのかなっていうのは、何となく僕は産業の流れでは、思う節があつて。多分コミュニケーションの話には、なっていくんでしょうけど。やっぱりその、空気を読んでいかなきゃいけないとか。空気なんて読めやしないのに。そういったコトバが出てくるのも、どうしても個人が何に対して付けなきゃいけない能力かわからずに、皆がそれぞれを気にしながら生きていくっていうのは、やっぱり教育場面と、そこから大学卒業以降の就職へと差し掛かる現場に見られる教育と現場の一致しない関係。そういう現状には差し掛かっているのかなって思いますね」

今回は、参加者同士の中で、どんどん話が展開していきます。これは過去のラウンドテーブルの中では、際立った傾向だったのかもしれませんが。支援される側の当事者たちの語りが、参加所の語りの世界を誘発しているかのように私たちには映っていました。そんな中、大学卒業後5年間のフリーター生活を経験し、再び大学院へと舞い戻って来たE君のライフストーリーにみんなの関心が集まります」

Iさん「フリーターを5年ですか？」

Eさん「はい」

Iさん「それから、大学院の学費というか、その一応の目処を立てるだけは貯めたんですか？今からもそんなに不安とかないんですか？何とかなる？」

Eさん「それは、めちゃくちゃあるのはあると思うんですよ。やっぱり皆の流れっていうのを考えると、就職をしていて。会社が潰れるか潰れないかの不安っていうのは、経済の流れであるかもしれないんですけど、やっぱりその基盤を持たないっていう不安はありますよね。でもまあ、最悪路上で過ごすってなった時は、税金払いたくなるんだろうなって思ったりするんで。あの、まあある程度の食っていく仕事はしていけないといけないかなって思いますね」

Iさん「ある程度食っていくために必要なお金って、どれくらいやって思っておられるんですか？別に正しい数値じゃなくて、感じで。去年の日本人の平均年収が403万円とかっていうのを、昨日聞いてたんやけど。それを高いねえ、低いねえっていういろんな感想がありましたけど、今自分はそれより低いですって答えてる非正規職員もいたしね。それをどう

思うかということやけどね」

Eさん「僕、月12万くらいあればいいじゃ…」

Iさん「いいんじゃないだろうかと」

Eさん「そうですね。あとは家賃をどんどん下げていかなきゃいけないのか。いいステーキを食べたくなったら服を古着屋に売りに行くのかっていう選択肢がだんだん迫られてくるのかなっていう風に思いながら、いる感じですけど」

Iさん「そう、403万円だそうですねよって言ったら、街頭で女性たちが、「これで子ども出来たら苦しいよね。無理だよな」とかいう感想を言っていましたけどね。ふーんと思って聞いてたんですけどね」

塾長「まあ所帯持ってたの話ですよ。子どもが出来て、みたいな話でしょ」

Iさん「子どもが出来たら苦しいよねっていうような話でね。述べてましたけどね」

塾長「そうですね」

Iさん「でもサラリーマンの平均やったから、そんな人達も含まれてるし、いろんな職種があるとは思うけど」

Hさん「非正規の人も、入ってたんじゃないですか？」

Iさん「入ってるのかな？だから、どういうことを基準に何を目的に生きていくか、何を優先にして生きるかっていうところによって変わってくるけどね。でもさっきのDさんの立派な理由、奥さんと子どもを食べさせないと、っていうところから始まるのって、いい動機ですよ。そこからキャリアが本当についていくっていう」

川畑「いい動機っていうか、地に足が着いた、基本、根っこみたいなところですよやんか。そこは外せないみたいなね」

Dさん「そうですね。まあそれも行き当たりばった

りで出てきただけなんで、別に…」

川畑「逆に言えば、出てきたことやからって言うても「知らん」って言うわけじゃないじゃないですか。そこを根っこにしてね」

塾長「やっぱり、でもずっとこれまで人間関係をつないできたもんな。その仕事をずっとつなぐ…、誰かに紹介してもらってこうなったとか。いろいろあったやん、これまでも…」

Dさん「はい、ありましたね。周りの人には恵まれてますよね」

ストレーターではない若者たちのキャリア形成には、必ずと言っていいほどそこに「出会い」があります。要するに、他者の介在が存在するのです。「変容」と「他者の介在」、そこにはとても重要な関係が存在しているようです。

塾長「全くそれはすごいな思う。私、割と最近にある銀行マンと話したんです。銀行マンって、30いくつくらいになってくると、やっぱりいろんな意味でストレスが増えてきて。自分としては納得が出来ないことをやらないといけなくなる。不条理で自分では到底、納得出来ないわけですよ。でもそれは、やっていけないといけない。しかも30歳くらいになってくると立場的には管理職になっていく。ということは、部下にそれをやらせないといけなくなる。そんな不条理なことをしなければならぬことも、かつて日本が豊かな時代、年々所得が上がっていく時代は、少なかったかもしれません。例えば不条理なことをやらなくても、売り上げは上がったかもしれないからです。そういうことがやっぱりあって、大体管理職になるくらいに退職する人って結構多かったりする。でも、子どもさんはい

ないんやけど、やっぱり所帯はあるので、辞めても次の選択肢がないっていう風に思うし、そこでずっと続けないといけなくなる。そういう話をわりと最近して、そういうことは現実に結構ある話なんかになっていう感じを持ちましたね。ただそういう状況の中であっても、自分が納得できるものを見つけていくのかなって思ったりもするんやけど。私は組織の中に居ないので、わからないんですよ、その感覚が。D君が、私のことをやりたいようにやってきたはるって言ってましたけど、現実にはなかなかそう簡単には運ばない。上手くいかないこともいっぱいあるけど、でも組織にいないだけ、痛みは自分で背負ったらいだけって思えるので、まあ不条理っていうものをあんまり感じないかもしれないな」

Hさん「組織の中にいると、あれですよ。あまり気が進まないこともやらないとあかんし、辞令一枚でどっか行って仕事しないといけなわけやから。そういう辛さとか、本当はこの仕事がしたいんやけどなって思っても、いつかはその職場を離れなあかんっていうことがある。自分がその組織の中でずっと、未来永劫やれるわけではないし。歳重ねてきたらその組織をやめていく時が来るんで、それまでに、後が続く人をちゃんと育てとかないとあかんとか。そういうのがあるから、どうしてもそうならざるを得ない。そういう時に、本当にこの仕事嫌やなって思って。もう辞めたいなって思うことは何回もありますし。何でこんなこと徹夜してやらなあかんねんって思いながら、でも間に合わなかったらそれはそれで問題やし、仕方ないなって思いながらやってきたことはいくらでもありますけど。ここ最近ですよ。I先生とお付き合いさせていただくような職場に来てから。この

仕事って結構面白いやんとか。今の仕事でも
そうなんですけど、面白いやんって。自分が
そこでやってることが、何かの役に立ってる
なってはっきり見えてくると面白いと思う
んですけど、この仕事って、目に見えない部
分が結構ある。今やってるのがどう生きてる
んやろうっていう部分も結構あるんですよ。
歯車の中なんやけど、全体の中で歯車の位置
がわからへんから、とにかく何かやらされて
るっていう感じしか残らない」

川畑「工場と一緒やね」

Hさん「そうなんです、まさにその通りで。そんな
感覚の 때가、若い頃によくありました。これ
って何のためにこの作業、集計やってるんや
ろうな、これ何の意味があんのやろうなって
いうのはよくありました。それを徹夜してや
らないといけなくて。こんな辛いことはな
い」

塾長「その時はやっぱり、我慢をしてはるんでは
ないか？」

Hさん「そうです。これ終わったら飲みに行ける、
とかね。これ終わったらちょっと休み取って
遊びに行ける、とかね。そんな感じですよ。
何か先に、自分がやり終えたことに対する小
さな褒美を持っておかないと…」

川畑「こういうある程度まとまった仕事が出来て
て、いきなり国から、こうしろって言ってき
たりするわけでしょ。それで嫌やなとかって
思うんやけど、それで言ったら負けじゃな
いですか。それは面白くないから、そういう
ことを急に厚生労働省が言ってくれたから、
実はこういう仕事に発展できた、という風に
ね。出来るだけ持っていこう、という風には
言ってましたね、職場では。出先の児相やっ
たから、いろんなことが自由やったからね。
自分の思ってることとしてることが出来る

だけ一致するように頑張ろう、みたいなこと
はしてましたね」

Hさん「だから、意識が変わってきたのは30歳に
なる前くらいからですかね。仕事って、辛い
ことばかりやったら面白くないやん、何か
面白いことを仕事の中で見つけようか、って
いう風に変わってくると変わってきました。
例えば、私は東京で勤務していたんですけど、
いろんな方と会う。この人たちとお話して
たら楽しいやんな、とか。こんなこと知らん
かったわっていうような。そういうところで、
面白いと思えたら仕事が面白くなっていく」

「組織をどう考えるのか？」あるいは「組
織の中における自己実現とは何なのか？」、
「そんな大人たちの葛藤を彼らはどう乗り
切ってきたのか？」。まさにそんな話に、若
者たちが耳を傾けています。

川畑「はい。いろいろ話が出てるわけですけど。ち
よっと、それぞれの人ね。年齢もいろいろ、
立場もいろいろやし。自分に引き寄せたところ
で、こういうことを思う、みたいなことが
あれば、皆さんしゃべってみませんか？どうで
すか、Jさん」

Jさん「そうですね。始めの5人の皆さんの話を聞
いてた時に、私も自分だったらこんな風に話
せるかなって考えながら聞いてたんですけ
ど。私は、大学進学まではずっとストレート
に来たんですけど、その間につまずきって呼
べることはあったんです。大けがをして運動
が出来なくなったりとか、親とすごいめた
りとかはあったんですけど、無理矢理に、普
通の方に、大部分の方の道に戻された感じが
して。それが嫌だったはずなのに、何でここ
まで行けたのかなっていうのは聞いて思

ってました。親が教師っていうのが大きいかなって思っていて、そのせいだって思って大学入ってから爆発したんですけど。それまでに、自分が考えて行動するだとか、親に逆らってみるだとか。そういったことが出来ていたら、そんなに大きな爆発にはならなかったかもしれないし。あんな痛手を負わなかったかもしれないしっていうのを考えてました。あんまり上手くまとまってないんですけど、そんなことを思っていました」

川畑「いやいや。Kさん何か思ってることは？自分の年齢なりに、自分の生活に引き寄せてとか」

Kさん「私も結構回り道して、この夏に高校の単位が取れたっていう状況で。高校が今の高校で3校目なんですけど。皆さんの話聞いてて、いろいろ考えさせられました」

川畑「どんな感じがする？今、出てる話聞きながら」

Kさん「うーん、話すの苦手で、知誠館に来た時は、高校2校も辞めてるんで。高校卒業するためっていうので来させてもらったんですけど、塾長には、その後の進学どうする？大学行く？とか。そういう進路を出していただいて。高校卒業するっていうのがあれやったので、そこまで考えられなくて。何て言うか、いろんな道を教えてもらったっていう感じです」

川畑「それはいい感じ？」

Kさん「はい」

川畑「ああ。ありがとう。Cさんどうですか？何かあれば」

Cさん「そうですね、私はまだ目標っていうのが見つかなかただけ。地に足が着いたとか、その瞬間はやっぱり嬉しいですよ」

Dさん「その瞬間はあった？地に足が着いたっていう」

Cさん「私ですか？私はまだまだ着いてないと思います。まだここで目標に向かって勉強させ

てもらってますけど、まだまだ着かない」

Dさん「ああ。ちょっと聞きたかったんですけど、看護師とか助産師っていうのが、ふっと出てきたの？」

Cさん「ああ…私、親が看護師なんですよ」

Dさん「ああ、そうなん」

Cさん「なので、その影響もすごく大きいです」

Dさん「あんまり理由も無くっていう人を見たことなかったから。そういうことか」

Cさん「そうですね。日々親の話を聞くので。まあ看護助手として働きたいなって思って、範囲を広げて面接行っただけなんですけど、やっぱり中卒っていうだけで、面接さえしてもらえないところもありますし。看護師の仕事ではないんですけど、私は今の施設で働けてよかったなって思ってます」

大人の援助者に交じって、知誠館の生徒たちが自分の考えをコトバにしていきます。それは決して理路整然としているわけでも、流暢なわけでもありません。しかし、その一言一言にはしっかりした質量感があります。

川畑「なるほど。小林さん、何かどうですか。思っていることがあれば」

小林「ちょっと脈絡がずれるかもしれないんですが、子どもの育ちを考えるっていうテーマに沿って、一応私なりに考えてたんですが…。今学校で働かせてもらってるっていうこともあって、学校での教師の意識とか立場をすごく考えて。今ちょうど、休みがちというか、もう不登校になるのかなっていう子も学校にいたりするわけです。でもその子に対しての学校の対応っていうか、目指すところ、OKとするところは、学校に来ることとか、

進級することとかが、その子に対しての対応の中心課題なんです。でもやっぱり、不登校という形で表れてるのは、その本人にとってはレジリエンスを身につけることへ繋がるような大事なつまずきというか…、敷かれたレールに対して、それをよしとしない自分の意志とか、その背景にあるその時、その時の家庭環境とか、あるいは人間関係とかの悩みや自分の深い葛藤が表に出たことなんで、そのせつかくのつまずきを、学校の表面的な対応だと、それをないがしろにしてしまうのかなって、本人の悩みをやり過ごさせてしまうことになるのかなって思うんです。じゃあ、どうしたらいいのかなって考えてたんですけど、やっぱり学校の対応とか指針とか、学校っていう枠の存在は必要やと思うんですけど。例えば学校の中で、生徒指導で決まりを守ることを指導する教師側は、決まりを守るっていうことは伝えるべきでしょう。だけでも、教師の価値観まで押し付けるのはどうかなって…。掘り下げると、教師の価値観って私が思ったのは、教師になる人は、ひかれたレールに乗っかっていける人、ストレーターっていうマジョリティの人が多いと思うんです。何の疑問もなくレールに乗っかっていくことを自分たちができて、それをベストとする感覚を暗に押し付けてしまってるところがあるのかなと。価値観とか驕りとかも入ってしまってるって思うと、Dさんの塾長さんに対する感じみたいに、やっぱり教師って、Dさんにとっての塾長さんみたいな存在で、キーパーソンであるべき存在やと思うんです。だけど、やっぱり価値観を押し付けというか、枠にはめようとすることで、それが出来ないのであれば、どうなんですかね。でも一番はつきり思ったのは、教師の社会人枠

を半分以上に出来たら、もっと多様な対応ができるように変わってたのかなって、現状はだいぶ違ったのかなって思ったりしてました」

塾長「今聞いててね。私の中にも、つまずくことって大事やっていう思いがあるのね。でも、つまずいた人にとっては、つまずきたくなかったというのが、正直やと思うし、さっきHさんが言ってみたみたいに、やりたくなくてもやらないといけないことがあるというのも事実なんでしょう。多分、誰もつまずくことを最初から望んではいないし、あるいは、どうしようもない現実っていうのを認めないといけないことってあるわけですよ。私の上の子の場合は、いろいろハンディがあるのでね。ある意味どうしようもないわけですよ。何をどうしようが、現実はやっぱ覆っていかないっていうことがあるし、どうしようもないことを引き受けないといけない。でもどうしようもないことに、片一方で人は潰れるんですよ。でもどうしようもないことに、人は何か希望を見出したりとか、そういうことがあるような感じがするんですよ。その違いがめちゃくちゃ大きい。今日はここ知誠館で実際に学んできたりとか、今学んでたりとかする生徒たちが結構いるのでね。例えば、私たちは体験活動っていってどっか行ったりするんですよ。車でね。結構皆、盛り上がるんですよ、無邪気に。ここには普通の塾の子も来てるので、どっちかって言うとそっちの子は、冷めてるんですよ。盛り上がりません。でも、知誠館の子は、結構皆盛り上がる。この違いはいったい何なんやろうと思ってね。終わった後も帰らずにKちゃんとMちゃんでもマンガをいっぱい描いたり。何や訳のわからんことをやってるんやけど、キャツキャ言

って盛り上がってる。でも一方で、皆どうしようもない現実っていうのを背負ってるわけですよ。そこにね、どう表現したらいいのかな。改めて何か思わされるんですよ。それが何とも言えないんですよ」

問題や挫折といったネガティブなものをポジティブな機会へと変換して未来を拓くのか、あるいはそのネガティブなものの中で潰れてしまうのか。その違いは大変大きいように思います。先の「セカンドキャリア」ということと「機会開発」、この二つの概念はとても密接につながっていくのです。

川畑「それ、コトバで表現してほしいな」

塾長「いや、コトバも足らんやと思います。私いつもCちゃんにコトバ足りてないで、って言ってるんですけど、私もそれをコトバで表現しきれないんですけど、そうしたい。それで、そういうことを表現できる場っていうのをやっぱり作っていきたいっていう思いもあるし。ものすごく微妙なことで、こっちに転ぶとそこで潰れていくんですよ。でもこっちに行くと、そこから希望が生まれるんですよ。これって何やろう？自分の中でそういう感覚がある。だから、それを豊かさとか、つまずきの価値とかっていう風に…それをコトバで表現すると、すごい陳腐な気がします。コトバが足りない気がする。そんなことを、小林さんの話を聞いてて思う」

Hさん「こっちに転ぶか、そっちに転ぶかってあったけど、私が振り返ってみると、そういう時って諦めなあかん。まあ仕方ないやん、みたいな。スパッと、仕方ないやんってその時は考えちゃうことが多くって。これやりたいんですけど、仕方ないやん。だから、こっちやら

ないと仕方ないやん、みたいな。そんな感覚で今まで生きてきた。それってすごくいい加減なところで動いてる部分があって。どうしようかって真剣に悩んで悩んで、ってあんまりしてないよな、いい加減に生きてきてるよなって…」

川畑「さっきのね、車の中での話。あんまり盛り上がりへん場合は、他のこともいろいろ考えるから。だから分散して、どれにもめり込めない、みたいな感じがあって。でも盛り上がると、そこだけに集中して盛り上がる、みたいなね。いや、さっきの学校の先生の話であつたけど、先生が生徒の話聞いてね。君の気持ちはよくわかるけど、それじゃあ生きていけないのよね、みたいなことを言われたってどうしていいかわからへんし、みたいなね。そういうこととどっかで重なるんですよ。そういう風に言えば、一つのことに一生懸命になれるのは幸せですよ、やっぱり。でも、遊んでる時間にもっと勉強したらとか思ってたら、そりゃ社会的にはそつなくいけるかもしれんけど、どれが一番好きやねんって聞かれたら、どれも好きじゃない。みたいに言わざるを得ない、みたいにしたらあんまり幸せじゃないですよ」

Hさん「それって、わかるような気がする」

川畑「うん…幸せじゃないんだけど、それを幸せと思わされて生きてる、みたいな部分が…無いかなあ」

Hさん「わかる部分もある」

川畑「いや、最近本が出て…まだ読んでないやけど。大阪で子どもらをほったらかして餓死させた事件がありましたでしょ。あのお母さんが、週刊誌レベルやけどいろいろ見ていったら、小さい頃からいろんなことに気を遣う子やったらしいんですよ。家庭の中もいろいろ

あってね、難しくて。子どもやけど、ずっと大人みたいな感じで生きてきた子でね。結婚しても、いい奥さんなんですよ。子どもが出来ても、いいお母さんなんですよ。ところがある日プツンしてね、入り浸ったところがホストクラブなんですよ。それ見てるとね、何かいろんなことに配慮してっていうのは持たへんのやろうなってね。入り浸った先のホストクラブなんて、そこでは子供でいられる、みたいな場所ですよ。世の中に配慮しなくていい。みたいなこと考えるとね…これが好きやからそれに浸ってられる、っていうのはすごく大事やし、能力やし、力やし。みたいなね。そういうのが許されへんところがあるのかなって。(Mさんに向かって)あの私の中3の頃に、大人の人がいろんなことしゃべってる中で聞いたような経験は全然なかったなと思うんやけど、あなたとしてはどんな感じがする？いろいろな話をここで聞いて」

Mさん「何て言ったらいいのか…」

川畑「聞いてた話の中で、ここが面白かった、ここがピンときた、みたいなところある？」

Mさん「私はまだ、だんだん進んでいってるところなんで…、いろんな、人生っていうか。自分の中で、20歳とか、どんな風にそうなっていったらいいかっていうのを、いろいろ聞かせてもらった気がする…」

川畑「はい」

塾長「実は彼らは、月に一回やけれども、皆が自分自身のライフストーリーを語ってっていう場を開いてるんですよ。その中学生のトップバッターがMちゃんでした。彼女は、初めてみんなの場の中で語るんやけど。その時に小林さんは初めて来たんやね。で、小林さん、もう感極まってしゃべれへん、みたいなことが

あって。でもMちゃんはよくしゃべってくれたし、みんな感動した、その時は、ちょっとどうかなって思ってたんやけど、彼女はとてもよくしゃべったんですよ。本当にいろんなものを抱えて来てるので、今まで語れなかったことが、いっぱいあるわけ。いろんなことが実はぐるぐるぐるぐる回ってるけど、やっぱりコトバに出来ない。言っても聞いてもらえなくて傷ついたりとかっていうことがあったんやろうと思うんやけど、ようやく彼女が語り始める。今日も実は、彼女が来ること私自身は全然知らなかった。でも彼女は実はこういう場に興味があったんや。そうやんな？」

Mさん「はい」

塾長「そうやんな。だから彼女はやって来る。だからこのMちゃんが、こういう場で、全然知らん人達の中で、緊張もするし、たどたどしく語るわけやけど。でもそこに、いっぱい何か思いがあるわけなんです。これがねえ、何とも言えないわけですよ。私からすると、そういうものをキャッチしてしまうんやけどね、何かね。私自身の中にある何かを呼び起こされるんですよ。そういうものに、自分自身が支えられてるのかなって思ったり。今日はAちゃんがトップバッターでいっぱいしゃべってくれたので…、やっぱりこう、すごくコトバが出てきたのにびっくりしています。前はそんなイメージは全然なかったので。コトバがこう、乗るんやね。コトバは不自由なんやけど、すごい大事なんですよ。だから川畑先生に言われたことじゃないけど、コトバで表現したいなって私も思うんやけど…」

川畑「コトバにならないって言ったら、家庭内暴力ですよ。家庭内暴力っていうのは、そこにコ

トバにならないコトバがいっぱい詰まっているわけやからね。それがコトバになれば、殴らなくても済む、というね。しゃべってるのが、コトバがあるからわかるわけで、コトバにならへんところについていうのもあるわね。はい。あと30分くらいの時間になりました。テーマに縛られなくても、何でもいいのでしゃべってみましょう」

Bさん「コトバの話と被るかもしれないんですけど、僕の中でキャリアを考えるにあたって、不安と、コトバっていうのが結構重要なものとしてある。元々しゃべるのがあんまり得意ではない方なので、僕の中ではしゃべるコトバよりも書くコトバの方がウェイトが大きいですって思います。考えてみれば、引きこもりからの脱却というのが、ここに来て、定時制の高校に行くんですけど、そこで、毎年年末に作文を書かされるんですね。一年間を振り返るっていう。それが冊子になって毎年残っていくんですけど、それが積み重なっていく中で、自分が抱えてることと、社会的なこととかを考えるようになって。自分の過去とこれからどうしようかっていうの考えるようになって。で、いざ受験になって大学に進むんですけど、その時に何をしたいかっていうのが、自分の中で、マスメディアに関係したいっていうのがあって、そういう方向に進むんですけど。自分の中のことをコトバで表現するっていうより、周りのコトバに振り回されてたっていうか…それをかなり気にしてきたっていうことが大きいと思って。そういう中で大学に入るんですけど。大学でも、その頃から本を読みだして。その感想を書いてサークルのフリーペーパーに載せるっていうことをしてたんですけど。そうする中で、自分の中の考えを文章にして出すって

いうのが徐々に好きになってきて。それが一番大きかったのが卒業論文なんですけど。卒論がなかったら大学院に行っていないでしょうし、ここにもいないでしょうし。そういう意味で、コトバっていうのはキャリアとほぼ同義のコトバっていうか。そういう風になりつつありますね」

塾長「今は、自分のコトバを作ろうとしてるんやね」

Bさん「多分そうやと思うんですけど」

塾長「そんな感じするわ」

Bさん「実際、その不安っていうのについても、見通しは立ってはいるんですけど。ただその、ちゃんと専門用語で〇〇的不安っていうのがあるんですね。ただ、それを自分の不安とイコールで結びつけるのはちょっとまだ抵抗があるんですね。この不安は概念的なものというよりは、個人的な蓄積によってできたものですし。それをわかりやすいコトバにしたっていうのが今のところの目標」

塾長「なるほど。私なんか、すごい執念やなあって思う。中学の時にここにやって来て、結局それをテーマにして大学院まで行くんやから。執念やなあ」

Bさん「前からその不安っていうのはあったと思うんですね。小学校、幼稚園の頃から。それが不登校、引きこもりっていう形で現れただけやという風に何となく思っただけなんですけどね」

川畑「手垢のついていない自分のコトバ、っていう感じ…」

Hさん「今の話を聞いてて、自分のキャリアっていうものは、実は自ら獲得していくものじゃないですか。コトバも自ら獲得していくもの。そこは共通点があるからそういう風を感じてはるのかなあっていう風に、今の話を聞いてて。だって、キャリアって、人から与えら

れるものではないと私は思ってるので。自ら獲得していくものだから。一般的に使われてるキャリアって、職業的な意味での、職業能力、経験を含めたものを言ってるけど、人生の中で考えたら、一つ一つの経験がキャリアなんじゃないかなあと。それはいろんな形があるんじゃないかなって。それは一つではないよなあって」

川畑「皆さんの話を聞いてね、真面目やなっていうのをすごく思うんですよ。一般的に言われる「真面目」って、真面目な人ってちょっとな…っていう風に言われる「真面目」なんやけど、例えばEさんの言う、自分はすぐ辞めてしまうんやから、そこで雇ってもらおうの申し訳ないって思うこと。自分の中での整合性に対して、めっちゃ真面目やん。でもそれは、世間に対しての真面目さじゃなくて、自分がそうしたい。それが、自分が獲得するキャリアっていうのと重なったなあって。子どもが出来たからっていうのも」

Hさん「そのところは、自分に向き合ってる所が非常に真面目やっていう風感じてて。私は自分に向き合っていないのかな…、ふらふらしながら。結果的に、世間的に見れば真面目って言われる部分なのかもしれないけど、自分自身の中では、果たして真面目なのかなっていうのは常にあります。ある意味、川畑先生がおっしゃってたのは、自分自身にしっかり向き合って、そのところで、しんどい思いをしたり大変な思いをしたりとか。そんなところにぶち当たってしまったっていうところを含めてね。そういう風な感じを、今の話を聞いてて…」

川畑「そういう意味で、自分は真面目なんやろうかっていう疑いをちゃんと持ちながら自分を見ていくのも「真面目」っていうことになる

のと違うやろうか」

塾長「私、今のB君の話を聞いてて、ヘレンケラーが日本に来た時に、アンラーニング unlearning って言っていたことを思い出しました。アンラーニングって、ラーニングの否定形なんです。だから直訳したら「脱学習」とかって意味になるんです。これを、その時の通訳したのは、鶴見俊輔さんですよ。鶴見さんは、これを「学びほぐし」って訳した。セーターの糸をほぐすみたいいな感じかなあ。だから私たちは、コトバの世界の中で生まれてるので、生まれた時からコトバの意味を背負って生きてるわけですよ。それを一回ほぐすわけですよ。ヘレンケラーは、高熱でいろんなものを失うわけやけど、それはサリバン先生っていう人と出会う中で意味を獲得していく作業があつて。それを彼女はアンラーニングってコトバで呼ぶわけですよ。B君の場合、コトバはいろんな意味をもう持ってしまうので、そこに自分のコトバを編み込んでいこうとすると、一旦ほどかないといけないのかもしれない。そういう作業があるのかもしれませんが。まあいろんな、当たり前の中に生きてる部分がいっぱいあるんやけど、当たり前って何なんやろうなあ、っていうのをどっかでほどいていく。そんなことは、いっぱいあるような気がするんやけど」

Hさん「当たり前って言われると、そこで思考停止してしまう。考えなくなってしまうですよ。それが当たり前やん」って言われると。それがずっと、世間では多くあつて。私が思ってるのは、だから自分自身何も考えてないのかなあ。世間の常識って言われるものに対して。そんな感覚はあります」

塾長「でもその「当たり前」からちょっと道を外れ

ていくと、すごいストレスがかかっていったり、すごいしんどかったりとか。それが子どもとか、多感な時期とかやったら、もう恐ろしい世界がやって来るんやろうなって思うんです。ものすごく孤独やし。新しい生徒がやって来ると、ここにいる生徒達は、その子にどうしていったらいいんやろう、とかっていうのを私に投げかけてくるんです。いろんなことを。それは私にとってはものすごい救いなんですね。私たちが何かを考えるっていうんじゃなくて、同じ位置にある子どもたちが一生懸命考えてくれる。何とも言えない世界が展開するんですよ。感動しますよ。それがまた、さりげなくて。コミュニティの温かさっていうのは何なんやろうねって思うんですよ。そういうのがものすごくあるんですよ。そこにすごく救われていたりっていうのがあったり。そういうところに何かコトバがあったら、新しいものを何か提示できるのかもわからないし。自分のコトバを得ると、強くなる。それはやっぱりそう思う。だって人に伝えられるからね。コトバってすごい大事やと思う。Kちゃんも、随分支えになってあげたよね。それが大きい。彼女は卒業式の際に、送辞を語るんですよ。そうしたらうちのスタッフなんかは、「私とか小中高と卒業式で一回も泣いたことないのに、大泣きました」とかって言うてましたね。何がこう感動させるのか。Kちゃんは、私、絶対読むの嫌やって言ってたんやけど、そのコトバの力っていうかね。そんなきざなコトバや難しいコトバが並んでるわけでもないんやけど、質量感が全然違うんやね。そこで編み出されるこの子のコトバの力が…」

「機会開発」にしても「セカンドキャリア

形成」にしても、その過程にコトバはとても大事な働きをします。従って当事者である若者たちが、それ以前に自分のコトバをしっかり身につけているかどうかは、とても大事なポイントになるのです。借り物のコトバではなく、自分自身のコトバ。それを身につけていくためには、何度も自分自身を振り返る省察的な思考が必要となるでしょう。

川畑「はい。そしたら時間があと20分くらいあるんで、最後に一巡、今日の感想などがあれば」
Dさん「えっと、初めて参加させていただいて、この存在を知ったのは、塾長が本を書かれて。その中にあったから知ったんですよ。そんなことしたはったんやと。読んで思ったんですけど、崇高なレベルの話をしたはるんやろうしっていうのもあって、あんまり参加出来ないんじゃないかなって思ってたんです。僕の仕事は、人間味に触れることがすごくあって。それがやり甲斐であったりするんですけど。そこら辺の部分で、いろんな人の気質に触れておくと、すごい勉強になるんですよ。おっしゃってたように、ずっと我慢出来る人もいるし、出来ない人もいるしっていう話があるので。すごい勉強になりました。もうちょっと自分の時間も作ろうかなと。こういうことを考える時間を作らないとなって思いました。本当に、ありがとうございました」
Bさん「この夏休み、高校生が書いた作文の添削してるんですね。そのテーマがちょうどキャリアなんです。だいたい80本くらい読んだんですけど、高校生のキャリア像っていうのがすごい偏ってるっていうか。仕事オンリーというか。そういうのばかりだったんで、この場で話されてるようなことに変えてい

けたらいいなという風に感じました」

塾長「キャリアは、ビジネスキャリアっていうのと、ライフキャリアっていうのがあるので。ライフキャリアになるとより大きい概念になるね」

Bさん「そういう感じで書いてる子も中にはいたんですけど、どうしても仕事に直結してしまう子がとても多い」

Lさん「仕事のキャリアっていうのに限定されたら、私なんてキャリアないよねっていうのが答えやと思うんですね。だって資格もないし、経験もないし。でも、今まで自分がいろんなことをやってきたのもあるし、やらされてきたこともある。それで得てきたことをちょっとずつ組み合わせて積んでいって、今の自分があるし。これがキャリアだ、って言いたいねって。内向きに向かなかっただけなんです。挫折することもあったし。それも、自分が出来なくて挫折したんじゃなくて、周りの力で挫折したっていうのがあるんですね。その時は、その相手にコトバの暴力はかなり向きましたよね。そんなこともやってきたなあ、でもそれを乗り越えてきたんやなああって。乗り越えれたのは、何でかはわからないですよ。乗り越えれたとも思わないし、乗り越えてる途中かなっていう気もするし。すごい複雑なんですけど。どこにゴールがあるんやろうか。…まだ途中なんです。とりあえず仕事のことだけがキャリアやって思われてるんだしたら、なんか寂しいなあっていう感じがします。いろんな意味でキャリアっていうコトバを使っていきたいなってすごく思います」

小林「最後、塾長さんが言ったはったことをすごく私も思ったんですけど、Aさんの話の中で、AさんがAさんのコトバで語ったはるのがわかりやすかったというか、響いたというか、

聞き入ってしまった。なので自分も、自分のコトバで人に自分のことだったり伝えたいことを伝えられるようなコトバを、上手く扱いこなせるようになりたいなと思いました」

Eさん「ありがとうございました。今回二回目参加させてもらったんですが、前回最後に、どんな楽しくなりそうだって言って帰ったと思うんですけど、今回も楽しかったです。キャリアは失敗も大事だろうなっていう話で、僕ちょうど2〜3週間前、他の研究者の人と話してて、「僕、失敗待ちしてるんです」って話してたところだったので、ちょっとびっくりした。僕、お調子者で生きてるので、どこかしらガツンと失敗をしないと新しい自分に気付けないし。何でも調子よく行ってしまうと、本当に孤独になってしまう。マイナスじゃない方の孤独感っていうのが、多分お調子者にはあって。失敗っていう体験をしないことには、自分が成長することもなし、新しい道っていうのは開けないなとつくづく今回思いました。失敗しましたが、乗り越えましたっていう話を次回できるように、目の前にあることを必死にやっていけたらいいかなって思いました。ありがとうございました」

Cさん「初めて参加させてもらいましたが、正直私は聞き取るという能力があまりないので、難しい話をしたはる時は、「？」って感じだった。しゃべるのも苦手なんですけど…。塾長が言ったはった、この瞬間が今幸せやっていうその気持ちは、すごくわかるんですよ。そういう話を聞いて、自分の中に入れたりとかして、自分で上手に表現出来たらなと思います。以上です」

田中「スタッフの田中です。今回お話を拝聴していて、私はわりと、Hさんとかがおっしゃった

ように、ストレーターであることにコンプレックスがあると言いますか。そういう気持ちを、知誠館にいて感じてたのを思い出し始めたということがあったんですけど。Iさんが、ストレーターじゃない人達は、今はそうでも、その渦中にいる時は本当にしんどいとおっしゃったように、私には心の底からは分からないんですけど、きっとその通りなんだろうなと思って。社会全体を見回した時に、キャリアはビジネスキャリアのみ、とか、社会は簡単なフレーズとか簡単なコトバとか、発しやすいコトバとかにどうしても惑わされたり、それが正解であるかのように思ってしまうんですけど。本当のことは、コトバにするのに手間が掛かったりとか、難しかったり。自分が今持つてる語彙では、表現出来ないような気持ちとか感情とかってというのが、もっと世の中で肯定されていったらいいのになって。マジョリティでもマイノリティでもなく、ストレーターでもいいよね、ストレーターじゃなくてもいいよね、どっちでもいいんじゃないっていうのがもっとみんなで共有し合えたらいいのにな、っていうのはすごく思いました」

Hさん「ここに来ると、感じるいろいろなあつて。皆さんのお話の中にいっぱい話もあるしヒントもあるし、いつも感じて帰ってます。キャリアの話であるのは、私自身、広い概念で捉えてる。いわば、ビジネスキャリアの部分と、ライフキャリアの部分全体でキャリアやと思ってるので。それって、塾長さんがおっしゃる「物語」。キャリアってそれじゃないの、って実は思ってる部分があります。そんな風に今日も感じさせていただいた時間でした。ありがとうございました」

Jさん「今日初めて参加させていただいたんです

けど、皆さんがいろんな話題を提供されるので圧倒されて終わってしまったなという感じなんです。最後考えてたのが、当たり前って何だろうなって。自分にとっての当たり前もそうだし、世間にとっての当たりの基準とか。そういうのもそうだし。そういうのを一回ほめて考えて、そこからもう一回見てみたいなって。当たり前なんてことなくてもいいんだけどな、っていうことを考えてました。ありがとうございました」

Kさん「えっと…自分は、頭で考えてることとかを口に出した話するのが苦手なんですけど、今日いろんな方の話を聞いて、いろいろ考えることが多くて、それを自分のコトバで伝えていけるような、そういう風になれたらいいなって思いました」

Iさん「楽しかったですね、今日は。若い人がねえ。いつになく多かった。初めてです、この感じ。それが今までで、一番よかったです。皆さん経験がね、話下手っていうのは、まだ慣れておられないのは当たり前で、そんなことは全然問題じゃなくって。でもこれからいろいろ感じたり刺激を受けながら、悪戦苦闘しているか。当事者である時は本当に辛いと思うんですよ。でも、本当のところ、あるがままにっていうところが行き着くところやなど。いろんな偶然もあつたり、それが必然やつたり。やっぱりでも、育ってきた環境も影響もある。ああはなりたくないって思ってた親をどこかで和解しながら受け止めていったりとか。そのことが自分のいい経験なのかは知りませんが、親と同じ道を選んでいくっていうのを意識できてなかったかもしれない。あるいはしてたかもしれないけど。だから悪戦苦闘するし、答えが見つからないまま苦勞する。苦しいけど、生き続けるっていうことですよ

ね。放棄しないで生き続けて行かざるを得ない。生きることを諦めないということだけ、持ってたらいいかなあって。行き着くところは、誰の形でもなく、自分のあるがままを受け入れられるようになるっていうのが死に近づいてる人間の目標かもしれないなって。落ち着いていくようにね。思春期は悪戦苦闘の年やし、私くらいの年を過ぎたらね、自分をまとめていく時期に差し掛かっていく、ただ寿命が延びていってるから、まとめていくのにどんな悪戦苦闘が始まるかなあとか。もうわからない。わからないまま、年取っても悪戦苦闘はいろいろ起こりますし。でもだんだん受け入れられるようになっていく。生きることを諦めないことが大事かなと思います。楽しかったです」

Mさん「いろいろ話をいろんな人から聞いて、自分は頭悪いのであんまり難しいことはよくわからないんですけど、こうやって話を聞いて、自分はやっとな顔を上げられるように、前に向けられるように、だいぶ先に行けるようになってきたので、先のことも考えさせられました。ありがとうございました」

Aさん「今日話を伺いながら何度か、感極まってしまう時があって。それを落ち着いて聞いてられる時に、瞬間にぐっと気持ちが高ぶったのかなっていうことを思うと、やっぱり…。だいぶ今は仕事もしていますし、いろんなことを考えていけるようになった。なので、ここまでしんどかった時期のことに引っ張られて、引きずられてその時間が止まってしまうようなことも今は少ないんですけど、今日聞いてても、感極まってしまう時の話っていうのは、自分が一番しんどかった時の感じがそのまま……（涙）……思い返されるというか。その時の感じが蘇ってくる。でもそれ

は、ちょうど2回くらい前のラウンドテーブルの最後にも、やっぱり生まれ変わって同じ人生を歩みたいとは思わないし……。でも、今日また月日経って、こうやって来ている自分はまたその時とは違って、自分の人生でよかったと思えるような感じがすごくして。今もすごく苦しいけれど、その自分の今の人生を、次生まれてくる時はもっと幸せにっていうのではなく、もう少し自然に自分の人生を引き受けられているし、これからもまた積み重ねていく毎日っていうものに自分自身も向き合いたいと思えるようになってるんだなっていうのは、今回のすごい変化として自分が捉えられているので、そのことも聞きながら確かめられたことがよかったなと思いますし…すみません、泣いちゃった…」

塾長「よかった。よかった、よかった」

川畑「子どもの虐待防止のことをよく考えてたんですけど。地域のいろんな役の人に協力していただいているんなことをしてるんだけど、どうしても専門家に任せる、みたいな感じになってくることがあるわけですよ。地域の民生委員さんも、役所の皆さんも、他のことやってきているのにいきなり虐待のことしなないとあかんっていうのはあるんやけどね。児童相談所が専門やからってなったりする。どうなんやろうね…。例えば電子工学のことなんかは、その専門家しか知らへんし、他の人にはわからへんのやけど、人の気持ちとかっていうことには、心理の専門家もいろいろおるわけやけどね。心理の専門家よりも他の人の方が心理に敏感やっと思う人もたくさんいる。ただそういう意味で言えば、人生経験と、それに基づく常識の力っていうのはすごい大事なんで、そこを専門家じゃないからっ

て言わず、皆で磨いていこうよと。専門家って言われる人も、訳のわかったようなわからんようなことを言うんじゃないで、自分の人生経験に基づいたところで考えていく。そのところも大きく持って、みたいなね。というところがキャリアのことに重なってきて。どう自分が考えて進んでいくかっていうことが大事になってくるんやなっていうことをすごく思いますね。というのが今日の感想です」

塾長「川畑先生、ありがとうございます。Aさんの話、何とも言えないくらいに感動的だったんですけど。彼女の言ったように、2回前、「私はこんな人生は歩みたくない」って確かに言ってました。その時と、今回の違っているのが、彼女が生きてきた証なんやろうなって思うんですよ。ものすごくそのことって大事なことやと思うんですよ。生きてる感覚。彼女は地に足を着けるっていうコトバで表現するんやけど、いつも感じられることじゃないのかもしれない。ふとした瞬間に、私は生きてるんやと。地に足を着けて立ってるんやっていうのを感じられる瞬間ってやっぱり感動するんよね。またこういうものを皆で共有できるのは幸せやなって思うし。それは彼女の話だけではなくて、皆の話でもあると思うんですよ。で、D君が、何で俺は呼んでくれへんのやって言ってたけど、ラウンドテーブルは、元々は指導者のための学びの場やった。指導者は指導するんじゃないで、学ばないといけないっていう前提があつて。そういう形でスタートした。今回は初めてのパターンやったんや。でもね、私いつかはそうしたいなと思ってた。私はいつもラウンドテーブルの冒頭で知誠館の生徒のエピソードを紹介してた。それが大体考えるきっかけ、お題やったわけや。でも今

回は、卒業生も現役の子も出て来てくれた。それこそ、リアルな「生」なんですよ。コトバなんて足らなくていいですよ。コトバはコトバ。それこそキャリアだって、キャリアはキャリア。運んでるんですよ。その時の思い、考えであるとか。それは入れ物にしか過ぎない。でも大事なんやけどな。そのコトバを介して伝わるもの、感じ取れるもの。そういうのがやっぱりすごい大事やと思う。Mちゃんが言ってた、私は前に向けるようになってきた、と。彼女は前に向けなかったんですから。ずっと下向いてしか生きてこれなかったんです。私が彼女と会った時に、この子を何とか前を向かせたいって思った。それには、何年もかかる。そんなすぐじゃない。この子が前に向けるようになるまで、何年もかかるわけ。それは、この子にずっと私たち寄り添いながら…。彼女にとっての経験でもあるけど、それは私たちにとっての経験でもある。大人も子どももひたむきさは一緒かもしれません。いろんな葛藤がありながら生きてるんやと思うんですけどね。指導する側とされる側、そんな関係じゃなくて、そんなことを出し合える場になっていったら、こんな場、他にないんじゃないかなって思うくらい素敵な場になるように思うんですけど。実は、私たちは裏庭に小さい森を創ろうと思ってます。こういうことを屋外でしゃべりたいなと思ってます。真ん中に大きな木を置いたテーブルを囲んで。こういう場は、いろんなところに来た方がいいかもしれない。こだわりを抱えた若者たちと、こだわりを持って生きてきた大人たちが出会う場。そういうことに発展していくと思うので、いろんなことで力になってもらいながら見守ってもらえたらなと思います。ありがとうございました」

ストレーターではない若者たちのキャリアを見つめてみたいと考えた理由。それは前回、大学生たちの就活の実態に触れ、その渦中で生じる様々な葛藤を知った時に、私たちが普段関わる不登校やひきこもりを経験した若者たちのそれとは、どこか大きく違っているような気がしたからです。それがいったい何なのか。そこを見極めてみたいというのが、今回のラウンドテーブルの目的だったのかもしれませんが。

ストレーターと、そうでない若者たちのキャリア形成の違い。その一つが、「物語性」ということでした。ストレーターでない若者たちのキャリア形成は、どこか挫折を前提としています。そういう意味では、「セカンドキャリア形成」としての傾向を色濃く持っているのかもしれませんが。挫折体験からの再出発。そこには自分と向き合い、他者と関わることを通して癒され、自己反省に立ち、自分のこれまでの枠組みを更新し、より大きな枠組みを構築していく、といった変容過程が見られます。だから、その変容を貫く文脈は個人の人生に重なり、彼らのライフストーリーを描くのです。彼らのキャリア形成を「豊かな世界」と表現した参加者がいました。その豊かさとは、経済的なものを指しているわけではありません。社会的なものでもないでしょう。それは、ひたむきに生きようとしている彼らの生き方に対して投げかけられたコトバのように感じられました。

支援と被支援、援助と被援助の壁がなく
なる時、そこにはキャリアという共通の話

題に対して向き合う人たちが集っていました。若者たちは自分たちのこれまでの経験を振り返り、そこを足掛かりとしてこれらの未来を描き、援助者たちは、若者のキャリア形成に携わりながら、自らのキャリアを問い、新たなキャリア観をそこに付加していこうとする。そんな更新性を備えた学び合いの場に発展していくことを期待しつつ今回のラウンドテーブルの幕を下ろしました。

